
CLASS

haruxtuti

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

CLASS

【コード】

N5806Y

【作者名】

haruxtuti

【あらすじ】

俺の名前は神木直弥^{かみきなおや}、太っているからクラスから無視されている。そんなつまらない生活を送っていたある日、教室で不可思議な出来事が起こる。その事件の後に目を開けるとそこは俺の知らない世界だった。その世界はもう既に俺の現実となっていた。死んだら終わりの世界、そこで彼はなにをするのか！

主人公最強です。

色々な指摘を受けたので修正をしたいと思います。

プロローグ

俺は目の前に出て来た敵を全て殲滅する。1体1体殺すのが面倒になつてきた。

この頃は毎日そうだな、もうこの世界に来て1年と6ヶ月、丁度1年半、

真上から降ってくる水の小さな塊が何個も俺の身体に当たり、弾ける。とても冷たい、

そういえば此処に来る前の世界でもこんな雨の日だったな、と思いつ出す。

俺は久しぶりに自分が居た世界のことを思い出していた。

あの世界はとても平和だった。争い事が無くて、いつも時間を遅く感じていた。

懐かしい、そんな感覚だ。俺は、いや俺達はもうその世界には居ないというのに……

俺は向かつてくる敵を殺す。そう、此処ではいつでも油断なんて出さないのだから、

俺は目の前に次々と出て来るアンデッドモンスター、スカルナイト骨剣士の攻撃を受ける。

「痛っ」

スカルナイト骨剣士の剣の斬撃を一瞬避けるのが遅れた。肩に鋭い衝撃が走る。

生憎雨だった為か傷口に水が触れて痛む。赤い血が流れていた。思ったより深く斬られていたようだ。

もうスカルナイト骨剣士は次の攻撃態勢に入っている。自分の手の甲を見る、ずっと使っていた自分の相棒である武器から白銀に輝く糸が1本出ていた。その糸を何本にも枝分かれさせて敵にぶつける。

スカルナイト
骨剣士はその糸でバラバラになり、消える。

「終わったか……っ痛いな」

肩を見ると結構の量の血が流れていた。雨と混ぜって不気味な液体になっている。

俺は右手で左の肩を抑えながらどんよりと灰色に曇る空を見る。
その空は酷く冷たく、その空から振る雨は酷く、とても酷く、寂しく感じた。

第1話

俺の名前は神木直弥^{かみきなおや}中学3年生、身長165cmくらい、体重10kg

気付いたかと思うがはっきり言って太っている。そのため身長もあまり伸びない。

一応顔は整っている？ でも太ってるから避けられている。いじめなどは無い、いじめは無いが話しかけてくる人も居ない。痩せようと努力はしているが中々痩せられない。

2年生の時に話す友達かは分からないが話し相手なら居た、がこの学校は1年に1度クラス替えをする。なにやら違うクラスの人達とも仲良くなれるように、だそうだ。

そんなお世話いららないのにな、と内心毒突きながら俺は弁当箱を広げた。

今は昼食の時間だ。俺の通うこの左右田^{そくだ}第4中学校は入学費用などが極端に少ないかわりに給食という物が出ない。だから毎日親に作って貰ったり、自分で作ったりする。俺は弁当に入っている玉子焼きを一口食べる。

正直言つて甘い、余談だが俺の親は甘党だ。玉子焼きに砂糖を入れてもいいと思う。だが入れる量が半端ではない。

まあとにかく俺に話しかけてくる奴はそうそう現れない。

でもそんな俺にも話し掛けてくる人は居てくれたりする訳で、

「どう？ 3年生は慣れたかな」

声を掛けてきた彼女は柏崎涼子、身長157cmくらい、体重？

誰にでも優しい子、

俺が唯一話せる子。容姿は美少女と言っていていい、肩まで伸ばした髪はとても彼女に似合っていた。
まあこの学年のアイドル的存在だろう。

「うん、もう慣れたよ」

「そつか……なら暇な時でも声掛けてね？ 私いつでも話し相手になるから」

「ありがとう」

俺は自分でも顔がにやけているのを感じる。こんな美少女に話しかけられて笑わない男子ははたして居るのだろうか？ だが彼女と話しているとき周りの視線がとても痛い。時々、なんでアイツなんかと話してるんだ……などなどの暴言が聞こえてくる。

そこに聞こえてくる重く低い声、

「テメエ、調子乗るなよ？ お前みたいなデブに話し掛けてくれる涼子さんに感謝しろよ」

ちなみに今話しかけてきたクラスメイト、田中健は涼子の事が好きなのだ。告白しても断られてもめげずに一途、俺はすごいと思う。そんな彼は身長170cmくらい、体重は確か70kg、筋肉隆々のゴリマッチョ、顔つきはいかついし髪型はスキンヘッド、怖そうで女子には人気は無いが男子とは仲がとてもいい。

「ごめん……気を付けるよ」

正直面倒ながらも謝罪の言葉を述べる。健はフンと鼻を鳴らして俺を上から見下ろしている。

いわゆる上から目線？ なのか。

「ああ、もう2度と話しかけるな」

健は強く言って自分の席に着く。もうすぐ5時間目が始まる。ま他
退屈な時間だ。受験生だから勉強しないといけない気持ちもあるが
中々身に入らない。授業ほど退屈な時間は無いだろう。

しかも外は大雨、このような天気だと気持ちまで落ち込んでしま
そうだ。

そう考えに耽っていると教室の電気が突然消えた。外が暗いせいか
何も見えない。

そして5秒後、足元が真っ白に光り始めた。

さらに10秒後、全てが真っ白になり身体に衝撃が走る。そして
町が現れた。

俺は驚き声も出せないで居た。周りも俺のクラスの人もビックリ
している。

周りはずつそうと森で茂っている。俺達が落とされたこの街みたい
な所は黄土色の石畳に左右に家、
奥には噴水が出ている広場があった。

そこへコールが響いた。

「ようこそ諸君、現実世界へ、」

最初俺は彼の言った意味が理解できなかった。

「よく来てくれた、皆、知らない人がいっぱいだろう、説明しよう。」

「私の名前は天野連鎖^{あまのれんさ}、キミたちをここへ送った者だ」

男は不適に笑い、あたりを見回した。そして……

「さて自己紹介も済んだ。この現象について説明しよう。まあ私は昔から……ある開発をしていた、その名も世界転換、名前の通り現実、つまりキミたちが勉強していた所だ。そこそこを入れ替えた。といえれば分かるかな？」

「分からねえよ！ もっと詳しく説明しろ！」

誰かが叫ぶ。俺も叫びたくなる気持ちも分からなくは無かった。それに補足するように連鎖の音が響く。

「つまり、キミたちの現実はずでにここなのだよ？ ここでの肉体はもうキミたちなのだよ。」

キミたちの現実はずでにここになった。戻す方法はない！ これからキミたちだけで成長し、生きていく。」

「どづいうことだよ！」

彼はその言葉を無視する。そして話し始める、

「ここに送られてくる条件、それは、中学校、高校に通ってる人達全員が対象だ。」

だからキミたちはここで生活しここで生きていく。あっちの世界にはもう戻れない。」

あっちの世界でのキミたちはすべて死んだ、ことになった。」

俺はこんな事をして何か理由があるのかと考えた。するとそれに応えるように

「何が理由、とかは関係無い、私は子供達の順応性、機転力、協力、そのような場面が美しいと思っっている。それが見たい、それが理由と言えれば理由になるかな？」

狂っている……そんな事の為に中学校、高校に通っている子供達を皆此処へ連れてきた。

周りを見ると顔面蒼白になっている者、立ったまま動かない者、それぞれだ。ただ……一人として言葉を発している者はもう居なかった。

「そろそろ理解してほしい。君たちの現実はこちらだ！」

「……………」

皆黙るしかない、当然だ。いきなりこの世界が君達の現実などと言われて混乱しない方がおかしい。

現に今、俺も派手に混乱している。

「よしじゃあこの世界の説明するよ。忙しいから簡単にね？」

口調がとても軽くなる連鎖、そしてすぐにこの世界の説明が開始された。

「まずこの世界に来たら職業を選んでくれたまえ、この世界には強い魔物などが生息している。金を稼ぐ方法も魔物を倒してそれをNPCに持って行って換金するか、自分で店でも建てて商売するか。それくらいしかない、ギルドってのもあるよ？ ギルドは魔物を倒す依頼を遂行する。それをすれば高くお金がもらえるよ。お金の単位は1円、つまり君達がいた世界と同じだよ。職業は自分に合った職業が候補として何個か選ばれる……」

さあ、君達の新しい冒険の始まりだ。イベント、行事などはNPCが報告してくれる。

あと言い忘れたけど君達は学校のクラスというチームに入っている。まあ解散して新しいチームを作るもいいし、嫌いな、足手まといになりそうな人達も捨ててもいい。

それが君達の選択なら大いに結構、この世界に命の大切さなんて必要ないのだから」

俺は身体の奥から寒気が走ってきた、皆も同じ様な事になっているのだろうか。

「現在キミたちの所持金3000円、防具、武器は最初にプレートアーマーとソード配布、ただし武器はクラスの数より1個少ない。だから武器、防具なしの人が出てくるわけだよ。まあ最初に死んでしまつかもね？ まあでも生き残れる確率は無いに等しいしね？」

「……そうだ！ さっきの一人が装備無しって言ったけどこれは自分が危険だけどその装備なしの人を守りながら行くか、それとも完全に見捨てて行くか？これが最初の君達への選択、なお、この話を最後にキミたちの元の世界とはつながらないからあ。じゃ」

連鎖はそう言い残し……声が消えた。

「嘘……だろ？」

あちらこちらで叫び声が聞こえる。俺も掠れた声で独り言を呟く。俺は冷静になり考えた結果、ここで生活するということだった。

冷静によく考えれば普通見つかる答えだ。だが俺は、既に冷静という言葉を失っていた。

この世界に来たのは日本の中学生、高校生、らしい。帰る方法はない、ではどうするか？ 生きるしかない。そこまで考えて不意に話しかけられた。

「おい！」

「なに？」

いつも俺を無視する連中だ……という事は涼子さん以外の人達という事になるが涼子さんの姿は見当たらない。

「お前、装備無しな？」

一瞬、奴の言っている言葉がよく理解出来なかった。段々と話が分かっていった俺は憤る。

「は、なんで!？」

俺は怒鳴った。当たり前だ、一緒に連れて行ってくれればいいだけの話なのに、男は笑いながら、それも軽々とこんなことを言うてる。

「だってお前使えなそうだし、はっきり言って足手まとい、まあ身体能力向上してるみたいだし大丈夫だろ？　じゃあな」

俺を見ながら笑い、後ろを向いて歩いていく同じクラスメイト、誰一人としてその後は此方を向こうとはしなかった。涼子さんでさえ目を逸らされた。

あいつ等は俺をチームから除外してそそくさで行ってしまった。俺は悔しかった、確かに足手まといだ。でもそんなの酷くないか？

この時俺はクラスメイトから見放された。そしてこの時俺はクラスメイトを恨んだ。

あいつ等が下した最初の選択、それは俺を見捨てるという事だったらしい。

第2話

あいつ等に置いて行かれてすぐに俺はどうするかを考えていた。俺は生憎まだ死にたくない、だから生きるしかない。一人で生きていくにはどうすればいい、どうやって一人で生きていく……

「やっぱり強くなるしかないよな」

答えの結果は強くなるという事だった。強くなければ生きられない、そのルールは俺だけではなく他のチームにだって言える事ではあるのだが、

「職業を選択かあ、これで俺の運命が決まるんだよなあ。鍛冶屋とかだったらどうするよ？」

つい、いけない考え事をしてしまう。これは学校でもマイナス思考だった時の悪い癖だ。

「職業選択をするか」

目の前にウィンドウが現れる。最初は不思議に思ったがなにせ身体能力が向上してるし魔法使いという職になれば魔法だって使えるのだろう。今になって驚かなくなっていた。

「えっと、職業は え？」

俺のオススメ職業欄には一つしか載っていなかった。

「極きょく糸師し? 糸で戦うのか、なんで糸なの? ていうかなんで職業一つしかないの」

俺は仕方なく極糸師を選択して専用の武器だけを貰う。職業を選択したら武器が貰える様だ……だが貰ったとしても防具が無いのは危険だろう。極糸師の武器は右手に付ける手袋のような形をしている。全体が黒く、手の甲の辺りに白色の蛇の刺繍が刻まれている。

「コレってどうやって使うんだ？」

俺はその手袋を嵌めて手を動かしてみる、だが何も起こらない。

「なんだよ、糸でも出るんじゃないかと思ったのに」

俺は手袋を見ながら考える、糸出ないかなと、すると手袋から1本の白い糸が出て来る。

「うおっ、出て来た」

俺は試しに糸を曲げようと考えた。すると糸は自分の思う方向に曲がる、どうやら俺の意思で糸を出したり曲げたり出来るらしい。

「何本も出ないのかな？」

俺は5本出るように考えた。すると糸は3本しか出なかった。

「やっぱり最初は上限でもあるのかな？」

俺は自分で結論に至り、試しに魔物を狩りに行く事にした。最初の相手は此処の世界で一番弱い魔物、甲虫だ。^{ビートル}（初心者向けのモンスター図鑑で調べた）

名前の通りカブト虫みたいなソイツは動きが遅く、攻撃が遅い、防

御力が極端に高い事を除けば普通に勝てる相手だ。

「よし、やってみるか」

俺は糸を1本出して目の前の甲虫ビートルをなぎ払った。感覚が無い。届かなかったか？ と思った次の瞬間、甲虫ビートルの身体が横にずれた。

「え、今の当たったのか、当たった感覚は無かった。当たった事も気付かずに切れた？」

俺は少し考えてある結論に至る。それはこの糸が予想以上に強いと言う事だった。

俺は試しに廻りの木に向かって糸を払う。

「すごいな、これは」

俺は驚愕していた。周りの木がなんの感覚も無く、糸を通したと思っただ次の瞬間、周りの木が倒れ始めた。

「もしかして、この極系師って職業、強い？」

俺は初めてこの職業が強いと感じる。その後も練習は続いた。

ある程度糸の扱いに慣れてきて甲虫ビートルを10数体殺してから一旦街に戻った。

モンスターを持ち帰るのではなく証明する為の部位を持っていけばいい。

そして連鎖が言っていたようにNPCに換金してもらうことにした。

「甲虫ビートル10体で合計1000円か、まあ妥当なのか？」

魔物を倒した場合、その魔物の象徴を持っていけば数にカウントされるそうだ。甲虫ビートルの部位は角だった。甲虫ビートルは1体100円つばいな。この世界に置いて回復アイテムなどは存在しないらしい、でも怪我をしたらどうすればいいんだろうか、クラスメイトに回復系を使うものが居るのかも知れない。まあ俺にそんな仲間などもう俺は見捨てられていないがな、

「今日はもう休むか。少し疲れたしな」

俺は安い宿に泊まり、明日に備えて寝た。宿代？ 100円ですけど、まあ藁わらの布団だから安いよね。次はもうちょっといい布団をゲットしよう。

寝るとき心に決めた俺だった。

次の日、俺は防具を買う事にした、何故かという俺には回復手段が無い。だから少しでもダメージを消費しないように軽鎧でも買うと決めたのだ。

「結構、高いなあ」

俺は店の防具を見て唸る。一番安い防具が2000円、まあ安いのだろうが今の俺からしたら充分に高い、必死に悩み悩んで決定、

「買おう、命には代えられない」

俺は決意して防具を買った。最初の3000円と昨日の1000円を今日でほとんどすっからかんだった。

「よし、今日も魔物倒して金稼ぐぞ」

俺は一人で決意して森に入ってしまった。

第3話

今日も目的は昨日と一緒に、甲虫^{ビートル}だ。でも今日は糸の使い方を覚えなからやるうと思った。何故かと言われれば今日NPCが言っていたがなんと自分で考えた技を自分で技名などを考えて放つイメージ力がアップして威力や発動が早くなるらしい。と言っても今は技と言われるものは無く、

「出せる糸が増えてきたら技を考えよう」

俺はまた甲虫^{ビートル}を1本の糸でなぎ払う。今さっき分かった事だが糸は枝分かれさせる事が出来た。俺は1本の糸から10本も分けることが出来るようになっていた。

「そっか、糸を寄り合わせる事が出来れば……」

俺はある事を思いつき枝分かれした糸をより合わせて細い槍状の形を作る。

「極系、貫通^{ドリル}」

俺はそれに技名をつけてそこら辺にいたビートルに向ける、その糸の槍はビートルに向かってまっすぐ進み、突き刺した。結果はうまくいった。その槍状の糸はビートルの頭から背中まで貫通していた。

「出来た！俺の技あ、でも見栄えないよね」

俺は喜び半分、落ち込み半分で最初の技を完成させた。これで糸がどんどん増えれば盾やもつと太い槍などに出来るかもしれない。

「さあ、分かっってきたら練習だ」

この後俺はひたすら練習し続けた、結果は甲虫を50体真つ二つにしたり、貫通したりと無残な光景になっていた。今回で5000円を稼いだ俺は懐具合もちよつと良くなったので、念願？の布団で寝る事にした。宿代？500円、よく考えれば破綻する額だよな、と今になって思う俺であった。

そしてまた次の日、俺は今度は甲虫ではなく角兎を狩る事にした。角兎は動きが早く特徴的な角で攻撃してくる、太っている俺には少々厄介な相手、まあこれだけ運動していればその内痩せるだろう。そんな期待をしつつも角兎を発見、見つかるとう厄介なので先手必勝と行かせて貰おう。

「極系、貫通」

俺の放った糸で出来た槍は見事に角兎に命中して見事一発で仕留めた。

ちなみに角兎証明部位も角だ。

「おお、コイツも1発で仕留められた。結構、威力上がってきてるな」

まあ甲虫の防御力が強すぎたというのもあるのだが、

「とにかく、今日は此処で角兎を狩っていよう」

俺は糸を1本出して臨戦態勢に入ろうとした時 目の前に10体もの角兎

がいきなり襲い掛かってきた！俺は対応しきれずに何発か攻撃を喰らう。身体を辿る寒気、死へと近づく第1歩、とても怖かった。見るともう角兎ラビットは突撃してきそうになっている。

「っ！？ 極糸、五月雨さみだれ！」

俺は咄嗟に思いついた技を使う。糸を出せるだけ出して1本1本で相手を貫く技、

咄嗟に思いついたのも関わらず全ての角兎ラビットが数本の糸に突き刺さり空中で死んでいた。

俺は息を荒げながら角兎ラビットの死体を見る。いきなり襲い掛かれて反応が遅れた……

俺は少々緩めていた気をまた張り直す。

「危ないな……気を付けないと」

俺は糸を戻し角だけを取る。角を取り終えてゆっくりと身体を上げる。そして一息しようとした時、悲鳴が聞こえた！。

俺は咄嗟に重い身体を揺さ振りながら悲鳴の元へと向かう。どうやら一人のようだ。

対する相手は、最悪だった。大角兎ラビットキング、角兎ラビットの親的存在で一人で相手をするには難しい相手だった。見た所、女の子のようだが、まあ目の前で死なれても後味が悪い。勝てるか分からないが行くしかない……

「大丈夫？ 早く隠れて」

俺は女の子を木の裏に移動させて、大角兎ラビットキングと向き合う。正面から見るとなんだか違和感を感じる。その理由は簡単でただ単に大きいの

だ。大角兎ラビットキングが、

1mはある巨体はもはや兎とは呼べなかった。

「極系、貫通ドリル」

俺の糸と大角兎ラビットキングの角が交差して俺の糸が押し返された。やはり無理だったか。と内心嘆息しつつも、勝てる方法を探す。するといい案を思いついた。

「極系、貫通ドリル」

俺は効かない筈の貫通ドリルを大角兎の前足に刺す。すると大角兎ラビットキングは痛さに呻きながらバランスを崩す。俺はその時にまた考えた技を使ってみる。

「極系、死系滅裂しじめつれつ」

俺は体勢を崩した大角兎ラビットキングを覆うように十数本の出せる限りの糸を出す。

その糸で覆う間に俺は大角兎ラビットキングの後ろに廻り、糸が完全に覆った途端に後ろを向いて引く張った。スウ　と切れていく感覚が始めて手に感じる。

全ての糸を引く張り終えて戻した時には大角兎ラビットキングはただの細長い肉片となっていた。俺は溜めていた息を吐いて隠れている女の子を呼ぶ。女の子は相当怖かったらしく木の陰でいまだ震えていた。

「もう出てきてもいいよ」

「あ、ありがとうございます。助けて頂いて」

「いいよ、そんな事より怪我は無い？」

「はい、大丈夫です」

「そっか、良かった」

俺は無事を確認してから此処より早く街に戻った方がいいと考えて女の子を連れて森を離れた。

大角兎は5000円と以外に安くないか？ 的な値段だったため2人で山分けした。

角兎は1匹200円、俺は11体倒したため2200円となった。そして今はなんであそこに一人でいたのかを聞いている所だった。

「で、君名前は？」

「鈴木優すずきゆうです。一応中学2年生やってたんで14歳です」

「へえ、そっか、俺の1個下なんだ」

「貴方の名前は？」

「俺？ 俺の名前は神木直弥、中学3年だったかな」

優は身長150cmと小柄な身体をしており髪を後ろで縛ってポニーテールにしていた。

優にはとても似合う髪形だろう。もう分かっているだろうが美少女だった。

話を聞くと優はクラスメイトとはぐれてしまったらしい、俺は納得して優に皆の下へ帰るように言う。

「直弥さん、この恩は忘れませんので、ありがとうございます」

あ、噛んだ、

「ありがとうございます」

言葉変えた。

「ああ、いいよそれくらいなら。それよりも早く皆の下に帰ってあげて」

「はい!!」

優はと言うと走り出して行ってしまった。

「クラスメイト、か」

俺はその言葉を噛み締めるように言う。だがすぐに俺には関係ないこととかぶりを振って考えないようにした。今日は疲れたから寝るか……

俺は自分の宿に戻り軽く飯を食って寝ることにした。

第4話

この世界に来て1ヶ月が経った、俺は角兎つるうさぎも余裕と知って黒熊ブラックベアーを倒しに行った。

ブラックベアー黒熊の爪や牙はとても鋭いため1発くらったら終わり考えていいだろう。俺はソロの為、経験をするのが早くて他のチームよりは俺の方が経験的には上だと思う、というのも俺はチームに知り合いが居ないからだが……悲しい

「さて行きますか」

俺は自分でも分かる程に戦闘するときの性格が変わったと思う。心が冷え切っているのだ。

俺は自分に活を入れて森の奥地に入ってしまった、森の奥地は杉みたいな木が高々と生えている。真ん中には湖がありとても綺麗な場所だった。そんな綺麗な場所に1匹の黒い影、

ブラックベアー間違いない黒熊だ。2mはあるかという巨体、全身が黒い毛で覆われており、とても怖い印象だ。だが生憎此方もめげてはいられない。

「極系、貫通ドリル」

俺は愛用している攻撃を放つ。最近では数十本も分けられるようになりとても威力は上がっている。当たった瞬間、相手に気付かれたようだ。

「ゲアア！」

ブラックベアー黒熊らしい叫び声を上げたあと此方に向かって来る。俺の攻撃は少し血が出る程度で終わっていたようだ。俺は糸を戻してまた技を使

う。

「極系、死系滅裂」

数十本という量の糸が黒熊を包み込む。それは死を表す糸、熊の後ろに周り、糸を引つ張る、糸を戻す。そして、熊から膨大量の血が溢れ出す。

熊は所々ずれている。勿論、糸を通った跡に沿って……

倒した後ながらも簡単に倒した事を喜んでいいのか分からなくなっていた。

弱い、まだ俺は全然弱い、まだ一人で生きていくには足りない技量だ。どうする、どうすればいい、仲間に入れてもらう？ ゴメンだ、ならと俺は考えていく。

もっと強くなるしかない 結局そこにたどり着く。

そこに聞こえてくる咆哮、振り向くとそこには3m程の巨大な蛇、天使なる蛇の子供^{ケツアルコートル}、大人は10mくらいだろう。ソイツが此方を睨んでくる。

「極系、螺旋」

糸が分かれて先端で繋がる。繋がった糸は回転を始める。さらにもう1本の糸を出して天使なる蛇に巻き付ける。これで天使なる蛇は動けない、そこに回転した糸の螺旋が天使なる蛇の頭を削り取る。血が飛び散り、俺の顔にも付いた。目の前にあるのはもう頭がない蛇、その蛇の子供はそのまま倒れていく。

俺は走り出す。目の前に居た黒熊に糸を巻きつけてそのまま走る。それだけで熊は斬れる。目の前の熊達には糸を数本横に振る、それ

だけで熊は皆倒れる。

でも、足りない。まだ弱い、俺はこの跡も惨殺を繰り返した。

俺はあと何日やれば強くなれるのだろう、俺は殺した相手の部位を取りながら考える。

とにかく倒す。目の前に居る魔物を全て、それが俺に出来る事なのだから……

俺は帰って定番のNPCに換金してもらおう。合計100000円、今日は結構稼いだ方か。

宿に帰ってそんな事を考えていつも寝る。俺はいつもこんな生活、最初に言った心が冷え切った生活、

誰とも話さず、誰とも接しない、この1ヶ月少なくともそうしてきた。

俺は自分が泣いている事に気付く。なんで泣いている？ 俺は自問自答をする。

答えはすぐに分かる。そうか、寂しいんだ。心の中が

俺は寝る。明日はギルドに行こうかと思っている。勿論、初めてだ。ギルドならソコの人も居るだろう。あわよくば話しかけて欲しい、でも話しかけて欲しくない。そんな自分の矛盾している心がどうしようもなく嫌だった。人と接するのが怖いから

俺は朝早くに起きてギルドへと向かう。登録をしなければならぬからだ。

ギルドは街の中心に在る為、俺は顔を出さないようにマントをつけて行った。

今の俺は毎日、無茶をして食事をあまりしなかった為か、かなり痩せたと思う、しかも痩せたおかげで身長もかなり伸びた。前は165cmだったのが今では175cmはあるだろう。

だが身体は動く、いや無理矢理でも動かす。強くなると決めた日からずっと考えていた。

そんな考え事をしている間にギルドに着く。

俺はすぐさま登録NPCがいる方に行つて登録を済ませた。

「それではギルドの説明を致します。

ギルドはランク制になっておりまして最初はEランクから、最終的にSSSランクとなります。今現在で最高なランクをお持ちの方は向井華憐様むかいかれんです。ちなみにランクはCランクとなっております。基本的どのランクを受けて頂いてもかまいませんが

責任は負いかねますのでご注意ください。他に何か質問は御座いますでしょうか？」

俺にはそんな名前覚えていても意味の無い名前だ。そんな強いのか？ 人気なのか、なら教えて欲しい、もっと強くなつていくにはどうすればいいかを、

「いや、いい」

一言、そう告げて俺はギルドを後にする。

「それでは頑張つてきてください」

俺はNPCの言葉を聞いた後、すぐに家に帰つて、狩りに出掛けた。勿論、ギルドの依頼じゃない、登録はするが依頼をするとは言っていない。

俺はまた殺戮を繰り返すのみ。 。
殺して殺して殺して、殺す。俺はその事しか考えないようにしている。

思い出してしまうのだ、どうしても、あのクラスでの出来事の一つ一つを ！

第4話（後書き）

次には結構時間が経ってますね

第1話

私がこの世界に来てからもう2年という月日が経とうとしていた。その2年はやつと2年経ったと思う人も居ればもう2年かあという人も居る。

「2年って早いなあ……」

つい独り言を呟いてしまう。この世界に来て2年の月日というのはあらゆる人の性格や人格を変えたとは思わぬ。私も目の前で何人かの人が殺されるのを見たことがある。

最初はその光景をどうしても見れなかった、見たくなかった、拒否していた。

でも……もうそんな感覚にも襲われない。人を死ぬという光景を見て何も感じなくなった。

それがどうしても私は嫌だった。

「どうしたの涼子、考え事でもしてた？」

隣のクラスメイトの女の子が話し掛けてきてくれる、私は大丈夫と返事をしてまた考える。

私はまだクラスのチームに入っている、数人は他のチームに行ってしまった。

最近、クラスで出来ていたチームが無くなりはじめている、理由は簡単だった。

生き残るため　その為には強いチームに入れて貰うのが一番手っ取り早い。

「このチームが嫌いって訳じゃないんだよね」

前の友達と一緒にのチームというこの雰囲気は嫌いではない。友達とも話せるし、楽しい。

ただ、どうしても2年前の出来事を私は忘れられない。

「直弥君、生きているかな？　もしあの時、私が変わりに行っていれば……」

2年前、私のクラスメイトが一人追い出された、っていうのかな？　追放された？　とにかく一人の男子が置いていかれた。その人の名前が直弥君、だから考えてしまう。あの時私がかわりに行っていれば……！！

「涼子さん？　大丈夫か」

ハツとなり声を掛けて来た方を見る、そこにはスキンヘッドの大男、健君がいた。

「う、うん大丈夫、ゴメンね。もう心配ないよ」

「そっか、ならいいんだけど」

健君は見た目に似合わず……って言ったら悪いけど優しい。前に告白された事もあるけどその時は断った。なんでって……好きな、考えるのは止めておこう。

「それでさ、今から黒鰐ブラックタイル倒しに行くんだけど行かないかな？」

「黒鰐ブラックタイル！？　そんなに強いボスに挑むの？」

私が驚くのは無理が無いと思う。今、発見されている魔物の中で最強と呼ばれている龍などの種族の次に強いとされているのが鱈ダイルと呼ばれている種族だ。まだ龍よりも強い魔物なども居るかも知れないが発見されていない。現在として鱈ダイルの種族は最強と呼んでも私にはおかしくない存在、しかも鱈ダイルの種族の中でも強さが別れている。その中で2番目に強いとされているのが黒鱈ブラックダイル、つまり今行こうとしている魔物だ。

「大丈夫だよ、この前なんて鱈ダイルの種族最強の魔物がたった一人に倒されたんだ。

チームでやれば案外、黒鱈ブラックダイルだって余裕だよ」

たった一人で　！　あの化け物を？　一体誰なのその倒した人は

……

もしかしたら……彼なのかな？　それなら会えるかもしれない！
会ってその人が私が探している人なら、私は、私は……

「うん！　私行くよ、黒鱈ブラックダイル　！」

彼女は誓った。その人が彼なのかを調べると　！　喻えどれ程確率が低くても希望があるなら……
私は一気に立ち上がり戦闘の準備を始めた。

そして場所が変わる。薄暗くて広い部屋、その部屋にただ一人佇む男、まだあどけない表情の顔立ちは整い、10人中10人が振り向くであろう美少年、長い前髪を垂らしてその隙間から目の前を睨みつけている。ついでに言うとその長い前髪で顔を隠している為、その容姿に気付く人は居ない。そして目の前にいるのは2m程の大きな大剣を背負った人の形をした骨、不動屍デットボーンという名の魔物だ。名前の通りそいつは一步も動かない。能力は魔法系無効という反則級な

存在、だからどうしても近接の剣などで挑まなければならぬ。だが奴の剣は重く、速く、強い、その一撃は並じゃない。喰らったら最後、なんて人も居るだろう。

「まあ俺には関係ないか」

男は自分の右手から白銀の糸を出す。

「この糸……最初は真つ白だったんだけどなあ」

ぼやきながら数十本にも及ぶ糸を操作する。彼にはこの魔物は楽すぎた。彼の糸は近距離の武器であり、また遠距離の武器でもある。

「きよくし極糸、オロチ墮蛇」

数十本もの糸が合わさり、太い糸になる。その糸は不動屍デッドボーンに巻き付き、不動屍は何も抵抗が出来ないまま砕けた。

「俺にとっては屑なんだよな。コイツ」

なら何故やっているか。理由は簡単、この魔物を倒す依頼がギルドに提示されていたから、

そしてコイツを倒すと報酬がすごい貰える。それだけ

「ギルドに帰るか」

一言呟き、帰る支度をする。コイツの討伐報酬は100万円、簡単に倒せる俺にとっては破格だが、他の人には地獄なのだろう。

現在、俺のギルドランクはS、他にSランクは居ない。つまり一等賞！ 嬉しくはないが、

Aランクに確か向井華憐むかいかれんとかいう奴が居たが興味ないな。
俺がSランクなんて事は誰にもバレていないし、バラすつもりもない。
最近、怪しまれているが下を向いてモゴモゴしていればばれない自信があるから。

そして、ギルドに着いてすぐに受付に移動する。そして依頼された魔物の証明部位を見せる。

「依頼達成おめでとございます神木直弥様。此方が報酬になります」

無機質なこの声にも慣れてきた。受付を離れて依頼板に移動する。

「コレをやるか」

目を付けたのは黒鰐ブラックダイヤルの無力化、少々物足りないが仕方が無い。報酬が150万だから行くだけだ。

「コレを受けます」

受付で依頼を受ける。

「かしこまりました。ではいつてらっしゃいませ」

俺はそしてすぐにギルドを出る。誰にも見られないように……
しかしそれも長くは続かない。一人の女が彼の事を見ていた。受けた依頼と共に、

「さっきの子、死ぬつもりかしら？」

女は一人で眩き、口元が笑みでつりあがる。彼女の名前は向井華憐^{むかいかれん}、Aランクだった、彼女は知らない。彼が自分よりも強いSランクだという事を、

そして彼もまた知らない。この依頼で過去を思い出す事を、

第2話

薄暗い森を一人で歩いてきた。とても静かで不気味な森、聞こえてくる音は風で木が揺れる音と地面を靴で踏みしめている軽快な音しか聞こえない。

まだ地面は堅いが鱈ダイルなどが基本的生息している場所ではほとんどが湿地だ。

つまり地面が水でどろどろという事だ、そのせいでバランスを崩し魔物の攻撃を受ける事も少なくは無い。勿論、普通は一人で歩く場所ではない。

「ん、水溜りか……」

だんだんと水で出来ている穴が増えてきたようだ。この水溜りも案外深いので注意しなければならない。

「よし、広い所に出たな」

歩いて1時間が経った頃、ようやく湿地へとたどり着いたようだ。ここで待ってれば多分、黒鱈ブラックダイルも来るはずだ。立ったままだと足がどんどん沼に沈んでいく。

俺は近くにある大きな木の枝に飛び乗る、ここなら見晴らしがいいし沈まない。

そのせいで緊張が解けたのか俺は木に寄り掛かり寝てしまった。

私達のチームは今、森の中を移動していた。目的は鱈タイルの種族の中で2番目に強いとされている黒鱈ブラックタイル、もう完全に真っ暗になったが私達の周りには小さい火の玉が何個もあり、明るい。これは魔法使いになった人の魔法、私も魔法使いなので火の玉を何個か出している。足元はどろどろで歩きにくくなっていた。

「皆！ 止まってくれ」

足元を気にしていると一番前方から健君の声が聞こえる。皆は何事かと前に進み出る。私も前に出て目を凝らすとそこには広い湿地が広がっていた。

「っ！」

そこで目にしたもの、それは広い湿地の真ん中で体長10mくらいブラックタイルの大きな黒い鱈が身動きをしないでジツとしている姿だった。黒鱈！
！ ただ見ただけで分かった。テラテラと不気味に光る黒い鱗、全体が黒いのにビツシリと規則的に並んでいる白い牙、

「大きい……」

小さな声で言葉が漏れてしまう。周りを見ると他の人達はもう突撃の準備をしていた。

急いで私も準備を始める。といっても身体を守る防具の確認と武器の用意だけが……
皆が臨戦態勢に入ると健君が大きな声で叫ぶ。

「突撃！」

皆が走り出す。黒い大きな鰐に向かつて、黒鰐も気付いたようだ。ブラックタイル
ゆっくりと目を開ける。その瞳は赤く、紅く、輝いていた。そして口を大きく開けて、
威嚇の咆哮が飛んでくる。少し足が竦むのがわかる、その咆哮で空気の塊を身体にぶつけられた感覚に襲われる。目を開けるのすら困難、

「うおおおお！」

健君を率いる近距離攻撃を得意とする者が次々と黒鰐に襲い掛かる。ブラックタイル
言い忘れていたが健君の武器は大きな斧、価値が高く作るにはとても高価な魔物の素材が必要な武器、名前はリザクターと言っていたが意味は分からない。そしてその破壊力が強い斧の一撃を黒鰐の脳ブラックタイル
天めがけて健君が叩き込んだ！

刹那、キーンという金属がぶつかり合う甲高い音が聞こえる。この時誰もが黒鰐の鱗に傷を付けたと思った。

「なっ！」

突然声を挙げる健君、そこに写っていた光景はありえないものだった。
健君の斧が黒鰐の鱗ブラックタイルに当たっている。そこまではいい、だがその斧の一撃を喰らったはずの鱗は傷一つ付いていなかった。

「え………？」

自身でも分かるような間抜けな声が出てしまった。一撃を喰らったはずの黒鰐はまるで気にしていないような表情をしていた。ブラックタイル

「くそっ！」

健君は大きく斧を振りかぶりもう一撃を与えようとする
が黒鱈ブラックタイルの行動は思っていたよりも素早く上顎で健君を吹き飛ばした。

「ぐああ」

健君は10mも吹き飛ばされ、木にぶつかり激突した。痛々しい声が聞こえてくる。

黒鱈は健君を吹き飛ばした後、素早く長い尻尾で周りの人をなぎ払う。

剣で受け止めていた人は剣諸共吹き飛ばされた。

そして残ったのは後衛に下がっていた魔法使いのみ……

「火炎よ！」

私は最後の足掻きで魔法を発動させて当てる。当たった魔法は全然効果が無いらしく平然としている黒鱈ブラックタイル、私は絶望を感じた。

助けて！

誰でもいいから……私達を！

助けて！

私は心の中で何度も何度も強く叫んだ。声に出そうにも怖くて出せそうに無い。

その願いが届いたのかは分からないが一人の男が目の前に現れる。その男には酷く違和感があった。似ていた、動きが雰囲気か2年前

に追放された男の子、
直弥君に　！　そして違和感に正体が分かる。直弥君は太っていたがこの直弥君に似ている男はスラッとした体格をしていた。それが違和感、

俺は五月蠅い音で目が覚める。何だ？　と湿地を見てみると十数人の人達が黒鰐ブラックダイルを倒そうとしていた。遠くだからよく見えないが状況はあまりよく無いようだ。
一人の男が吹き飛ばされてから周りの崩壊は始まった。連携がなっていない。
このままだと全員死ぬな、と軽く考えて次の考えを思考する。

「助けるか？」

目の前で死なれても後味が悪い、面倒だが助ける事にしよう。

素早く木の上から飛び降り全速力で走る。黒鰐ブラックダイルは一人の女子に襲い掛かるうとしていた。

「極系きょくし、貫通トッレ」

右手から白銀の糸を出して細く編み合わせる。すると鋭くて長い針みたいな武器が出来る。
この技は最初に俺が作った技、その細く鋭い針ブラックダイルが黒鰐の鱗に当たり、突き刺さる。

「血は出ないか……」

流石に鱗は傷つけられても血は出なかったようだ。

「なら極系、螺旋」

糸が螺旋状に回転して相手をバラバラに切り裂こうとするが黒鰐の
フリックダイヤル
鱗とぶつかり糸が崩れる。鱗は剥げてその部分だけピンク色の柔ら
かそうな肉が見えていた。

案の定怒った黒鰐は強烈な尻尾で俺をなぎ払おうとする。

「その技、待ってたよ」

俺は尻尾が来る方向に合わせて数十本の糸を寄り合わせた強力な糸
を作り出す。

その両端を持ち、身体の前で縦に構える。

そこへ高速の尻尾が迫り、俺はその尻尾を寄り合わせた糸で絡め取
る。尻尾が当たったと同時に糸を尻尾に巻きつけてわざと飛ばされ
る。

その結果、どうなるか？ その結果尻尾と俺を繋いでいた糸は反動
で尻尾を切断する。

「酔うな。コレ」

振り回された俺は軽く目を回しながら痛がっている黒鰐にとどめを
加える。

「極系、死系滅裂」

黒鰐の周りに白銀の糸が被さり一気に消える。事実を言っと消えた
では無く、移動した。

高速で引っ張られた白銀の糸は黒鰐を通過した時、真っ赤な糸に変

わっていた。

「終わった」

俺は一息ついてから早速部位証明を切り取り、ギルドへ戻ろうとしたその時、

「あの」

控えめな声で後ろから話しかけられた。その声は何処かで聞いた事があるような、とても懐かしい声だった。

「なにか？」

振り向いて見ると先程飛ばされた人達も此方に集まっていた。俺は話し掛けてきたであろう女子の方を見て何かを思い出しそうになる。

「助けていただいてありがとうございます。えっと、合ってなかったらごめんなさい。

……直弥君だよね？」

っ！？ 俺は久しぶりにこんなに驚いたと思う。そして思い出してくる、彼女が誰なのか。

先程吹き飛ばされた男が誰なのか。背中からは冷や汗が滲み出てくる。

「涼子……さん？」

この言葉を言った瞬間、俺は全てを思い出した。2年前の出来事の全てを！

第3話

ブラックダイヤル
黒鱈を倒そうとしているチームが負けそうだった。だから助けた、
そして今俺は目の前にある光景に驚愕していた。そして冷や汗をか
きながら喉の奥から捻り出されたような声、その言葉は俺が知って
いる彼女の名前だった。

「涼子……さん？」

自分でも笑えるくらい声が震えていた。なんでだろうな、こんなに
怖いんだろう？ 悲しいのだろう。分からない

「やっぱり直弥君なんだよね？ 体格とか声とか変わったけど……
私達のクラスメイトの神木直弥君なんだよね？ 私、すぐに分かっ
たよ？ 良かった……生きてくれた！」

目の前に居た涼子さんは泣きそうな顔になり膝から崩れ落ちてしま
った。泥の地面なのに、俺はどうすればいいのか分からずあたふた
していると一人の女子が進んで出てきて彼女を立たせて後ろに移動
してくれた。

彼女もまた、元クラスメイトなんだよね……

「直弥、お前は本当に直弥なのか？ 答える！」

怒鳴りながら進み出てくる面影には見覚えがあった。彼は黒鱈に最
初に突っ込んでいって呆気なく飛ばされた人物、彼もまた元クラス
メイト……

「そつだよ健、お前らに見捨てられて一人でここまで這い上がったきた直弥だよ！」

俺は最後の方には声を荒げていた。今更確認された所で嬉しくもな
んとも無い。

「お前、生きてたのか。一体何処のチームに入れてもらったんだ？
此処では一人では到底生きれるわけが無い！ 何処に入れてもら
った？」

俺は目の前に居る男、田中健に激しい憤りを感じた。

「何処に入れてもらった？ ふざけるなよ！ お前、俺がどこかに
頼んで入れてもらって生きながらえたとでも思っているのか？ 俺
は……俺は！ ずっと一人で生きてきたんだよ！ 今俺の周りに俺
の仲間みたいな奴が一人でも居るか？ いねえだろ！」

声を荒げながら怒鳴る。健は驚いたような顔になり黙った。周りも
静かで誰一人として声を上げる者は居ない。

「じゃあ、お前はあの時からずっと一人で生きていたのか……こん
な危ない所で」

「ああ」

確認してきた健に俺は短く言葉を返す。とても静かだった。今度は
俺が皆に質問をした。

「今回、此処に……ブラックタイル黒鰐に挑もうと言ったのは誰だ？」

静かなせいで余計に重く聞こえてしまう俺の声、そしてその声に健が静かに俺だ、と答えてきた。

「お前か、言っておくがお前らには黒鱈は倒せない。いや倒せるがもつと強くなつてから倒すべきだった……と言っておく。どうせ一人でコイツの親玉倒したとかいう話を聞いて出来るでも思つたんだろうな。結論的に無理だ。」

これはせめてでもの忠告のつもりだった。健は拳を強く握って震えていた。なにか言い訳をしようとしているのだろう。

「言っておくがお前らは俺が居なかつたら死んでいた。これはゲームじゃない、選択を間違えるとすぐに致命傷、もしくは死、それがこの2年間で分からなかつたか？」

嘲笑いながら健に言う。健は此方を睨みつけて齒軋りをしている。

「お前はなんでそんなに強い！　なんでそこまで強くなれた？　教えてくれ！」

健は聞きたいようだ。強くなる方法を　！　俺が味わってきた2年間を……

「俺が強い？　笑わせるな。強くなれる方法？　お前は一人で何十体もの魔物を相手にした事があるか？　ないだろうな。見てれば分かる、ずっとチームと一緒にとか4人とかで狩っていたとかだろう？　傷を負えば回復してくれる。後ろから襲われれば誰かが気付いて知らせてくれる。そうだろう？　それを俺は一人でやっていった。それだけだ」

声を鋭くして　俺が今までやってきた事を伝える。全員にとってこれは1歩間違えれば即死の方法、ずっと一人だった俺の唯一の最強になる方法、

「そんなの無理だ！　ならチームが強くなる方法を教えてくれ！」

健……お前は馬鹿か？　ずっと一人だった俺にそれを聞くか？

「知らない、強いて言えば誰か強い人でもチームに加えたりすればいいじゃないか。強い人なんてギルドに行けばいっぱい居るだろ？」

「……」

健は黙りこくってしまった。後ろを見ると涼子も泣くのをやめて悲しい顔で此方を見ている。俺は今度こそギルドへ帰ろうと背中を向けると一人の男子が声を掛けてきた。

「ならば、お前が戻ってくればいいんじゃないの？」

コイツは覚えていた。確かいつもチャラチャラしていて空気が読めない奴だ。そして今も空気が読めていない。周りの数人の男子は頷いていたが他の女子や健などは啞然としていた。追い出したくせに今更戻れ……と？

「ふざけるなよ？　お前らが追い出しておいて今更、はい強くなりました。じゃあ戻ってくださいってか？　いい加減にしるよ？　お前らは追放されて一人で必死に強くなつて、追い出した奴と再会して戻ってくれって言われて戻るか？　戻らないだろ普通」

男は下を向いて黙ってしまった。だが頷いて居た一人の男子が俺に剣を持って突っ込んできていた。俺は静かに右手を出して糸を1本出して男の頬の横を貫く。

「……奇襲のつもり？ 笑わせるなよ、遅すぎるだろ」

俺の放った糸は男の頬をかすりそこから血が出ていた。男はその場で動かない。いや動けない。

「じゃあ俺はギルド行くから、頑張つて強くなるか強い人探して引き込みなよ。最近は金で釣ったり性交で釣ったりしてる人居るみたいだし……」

俺はアドバイスをして今度こそ背中を向けて歩き始める。

「直弥君！ また会えたら、声掛けるからね！ だから気が変わったら……いつでもいいから戻って来てね……私はいつでも待ってるから！」

涼子は後ろから言ってくる。何故か苛立ちだしなかった、だから俺は手を挙げて返事をした。そして今度こそ歩き出す。暗くて地面が泥の道を……

「戻って来てね……か。俺はどうすればいいんだろ」

歩きながら呟く、戻るとしている自分が居る事が不思議だった。

「でも、戻らないって決めたんだ」

自分の言い聞かせるように、納得させるように……

「決めたのに！　なんで……なんでこんなに胸が痛いんだ？　くそっ！」

自分の胸を思い切り殴る、ドンと音がして衝撃と振動が伝わる……痛い。俺は歩く速度を速める。最終的に走り始める、どろどろの道で転びそうになる。

「どうして、どうしてこんなに悲しいんだ　！」

立ち止まり空を見る。その空は幻想か実物かは分からない、その空には満天の星が広がっていた。流れ星が流れる……まるで俺を笑うかのように、

第4話

何故かは知らない心の苦しみを無理矢理抑えつけてギルドへ向かい、
ブラックダイヤル黒鱈の証明素材をギルドNPCに渡す。

「お願いします」

「確認致します……終了致しました。依頼達成おめでとございませす。

神木直弥様、此方が報酬となります」

いつも通りの無表情NPCから報酬の150万を貰い、また次の依頼を受ける為に掲示板へ行く。

今回は何にしようか。もうちょい楽しめる奴がいいんだが……龍種を倒すには必ず2人以上で行かないと通れないって噂だしな……

つまらないことで溜息を吐いてしまう。そのせいで気付くのが遅れたようだ。

「ねえ、聞いているの？ その貴方」

俺に話し掛けてくる奴なんてそうそう居ない、だから少し驚きつつもゆっくり後ろに身体ごと振り返る。

するとそこには黒い髪をピンク色のリボンで両端を括った、いわゆるツインテールの髪の女の子が立っていた。俺は身長的に前屈みになってオドオドした様子で返答をする。

「な、なんですかつ。ぼぼ僕に何か用つですか？」

……我ながら完璧の演技だ！ これならこの子もさぞかし気持ち悪
がって逃げていくだろう。目立たない為なら手段は選ばない！ で
もこれ逆に目立つかな？

「……なんでそんな演技してるの？」

なん……だと？ 俺の2年間積み上げた一人ぼっちスキルが通用し
ない？
ありえない

「なっ、なんでえそんな事を言うんですか？」

「だって貴方、さっきNPCと普通に会話してたじゃない」

墓穴掘ったな……これは今度から此処に来る時点で喋り方をこれに
しなければいけないのか。また一つスキルが強化されたな！
ばれてしまっっては仕方がない。さっさと興味を無くしてどっかいっ
てくれるだろう。

俺は一人で納得して普通に話し出す。

「何か用？ 俺、君の事知らないんだけど……」

「うわあ、口調変わったあゝ、まあいいか。私の名前は向井華憐^{むかいかれん}、
一応ランクはAランクなんだけど……知らない？」

華憐と名乗った女は首を傾げて此方を見てくる。向井華憐といえ
ば確か俺の次に強いと言ってる奴だな、面倒だな……

「で、その向井さんが俺に何の用だ？」

俺は腰に手を当てて楽な姿勢になり聞いてみる。

「貴方、さっきやってた依頼フラックタイルって黒鰐の討伐よね？ 正直な所を言えば貴方何者？ と聞きたい訳だけれども」

「何者、って言われてもな。ただのしがない元中学生としか答えられないんだが」

一瞬顔を顰めたがすぐに平常を取り戻し軽いジョークを言ってみる。

「だって貴方、一人でアイツを倒したんでしょう？ 普通に考えればありえない。」

私だって一人でアレを倒すなんて出来るか分からないのに……

しかも私より上のSランクって言われてる神木直弥って言う奴も誰だか分からないのに」

その人、間違いない！ 俺だ！ まあよっぽどの事が無い限り自分の名前を明かすようなへマはしないが……

「向井さんは何がしたいんだ？ Sランクなんか探して何をしようとしてるんだ？」

正直に思ったことを言葉にしてみる、実際Sランクなんてのを探して何をしたいのが全く分からなかった。Aランクなら一人でも生き残れるはずだし……

「ええ、私はどうしてもやりたい事があるの……」

向井さんは少し悲しそうに微笑み、下を向いてしまう。

「やりたい事？ 教えてくれるなら教えて欲しい」

「笑わないなら……実は龍種を倒したいの」

「……へ？」

一瞬、彼女が言っている事がよく理解できなかった。

「だから！ 龍種を倒したいの！ でも龍種を倒すには2人以上とかふざけた条件をクリアしないといけないし、弱い人と組んでも勝てる相手じゃないし……」

彼女は段々と声を小さくなって行って、やがて途絶える。だが俺は可笑しくて笑ってしまいそうだった。

「なんでだ？ 別に向井さんならパーティー組んで龍を倒しに行けるだろ？」

笑うのを必死に堪えて疑問に思った事を述べてみる。

「1回行ったわよ。10人くらいで、でも……龍種の中で一番弱い龍ドラゴンを倒す事以前に、その龍ドラゴンの方へと行く道にいるモンスターにやられそうになって、断念した……ようは悔しかったのよ。これで分かった！？ 復讐してやりたいの！」

彼女は本当に悔しそうに歯を噛み締めて手を強く握っている。

俺はそれにとつとつ笑い出してしまった。

「何が可笑しいのよ！ そうよね、龍種なんて無理よね。笑えばいいじゃない……」

「俺の名前は神木直弥、ギルドランクはSランクだ。これでも一緒に連れてってくれないのか？」

この時、俺が言った言葉に周りが絶句したのは言うまでもないのだ

……

第5話

目の前で飲み物を飲みながら話す彼女に何度も言われている質問、俺は至つて普通にただ簡単に答えるだけ。その質問は俺が本当にSランクかという質問だ。

「そうだ」

「本当に？　嘘とか付いてない？」

「お前なあ……………」

俺は若干面倒になりながらも目の前の女子、向井華憐を見返す。

「別に信じるとは言わないよ。どうせすぐ分かるから」

そつだ、どうせ俺が戦闘を始めたらすぐに分かる事なのだ。

「……………分かったわ、それはいいとして貴方なんでそんなに髪を伸ばしているの？」

短い方が多分、というか絶対似合うような気がするのは私だけ？」

少々、不思議がりながら彼女は俺の顔をまじまじと見てくる。やがて何か思いついたように顔が明るくなる。

「私が髪を切つてあげ」

「断る」

無論、即答だ。なんで目立ちたくないのに髪まで切らなければいけないのだ。

大体、俺がSランクって事で結構注目浴びてんだから！
とは言っても自業自得ですよねぇ。

「絶対、切った方が似合うのに！ 大体貴方と私じゃ容姿的に釣り合わないでしょ！」

どう思う？ 貴方街中でとても可愛い女の子と髪がボサボサの男の子が歩いてたらどう思う？ 髪くらい切れよってならない？」

……何故俺は逆ギレされているんだろうか。というか問題そこかよ！

「いいだろ、俺の髪なんて俺の勝手だろ。まあその内切るから黙っててくれ」

「本当に！」

目を爛々と輝かせて此方を見ている華憐。勿論嘘だが……

「で、向井さんだっけ？ 龍種はいつ狩りに行くんだ？」

「その向井さんって止めてくれないかしら？ 普通に華憐って呼びなさい。直弥」

微妙に恥ずかしいな……華憐、うわぁ！ 俺なに考えてんだ！

「それで華憐、いつ行くんだ？ 俺はいつでも行けるんだが……」

「うーん、でも本当に大丈夫？ 死ぬかもしれないわよ？」

華憐は心配そうに此方を見てくる。俺ってそんなに弱そうなのか？

「大丈夫だ、ずっと一人で戦ってSランクになった俺は伊達じゃないからな」

「何か寂しい言い方ね」

何故だろう、心にすごい大きな傷が出来た気がした……

「と、とにかくっ行くなら早く行きたいんだが」

「そうね、私も早く帰って休みたいし」

俺と華憐は龍種の住む領域に向かい、歩き出した。

今俺達が居るのは龍種が住まう山の入り口、とてつもなく広い森を歩いていた。

今の所モンスターとは接触をしておらず順調に進んでいると言っていいだろう。

「まだなのか？ 龍種の住む領域ってというのは？」

歩くのが飽きた俺はダラダラしながら前に居る華憐を見る。

「まだ、みたい。今が丁度森の真ん中と言った所かしらね」

オイオイ、こんだけ歩いてまだ中間だって？ 笑わせてくれるぜ。

一体どれくらい歩いたと思ってるんだ？

俺は文句を言おうとしたその時、後ろに気配を感じる。

「華憐、モンスターだ」

俺は一言言つと気配がした後ろに身体ごと向けて右手のグローブを嵌め直した。

木の陰から出てきたのは大きな目玉に左右から手が生えたなんとも奇妙なモンスターだった。

「何だ？ コイツ」

俺はその変わったモンスターをまじまじと見つめる。そして華憐の方を見ると驚愕した様子で固まっている。

「アイツ……気を付けた方がいいわ、あの外見で騙されるかも知れないけどアイツの特技は幻覚を見せる事なのよ」

「へえ、名前は何て言つんだ？」

華憐が恐々と話す中、俺は落ち着いてモンスターの名前を聞く。

「アイサイズっていう名前よ」

俺はアイサイズという名前を頭の中で繰り返す、

「じゃあ、さよならアイサイズ」

数十本の糸をアイサイズに向けて放った
！

「え？」

華憐が口を開けたまま動かないでいる。今日の前にある光景はと
うと残酷なものだった。

直弥が出した糸のような物がアイサイズに何十本も刺さり、内側か
ら切り裂いたのだ……

糸を刺した後、その糸をまた枝分かれさせて量を増やし、切り裂く
技術、

これはいくら外側が強いモンスターだからと言って1本でも糸を入
れられてしまえば殺せることが出来るチートな技術。

「ん？ どうした。華憐、そんなに固まって……驚いた事でもある
のか？」

「直弥、貴方本当にSランクなのね……今分かったわ」

「何かすごい含みにある言い方のように聞こえたのは俺だけか？」

「ええ、貴方だけみたい」

彼女は呆れたように呟いていた。

「此処が龍の居る場所の入り口か？」

目の前にある大きな門、それをくぐると龍が住まう聖域のようだ。

「正確には一番弱い龍が住まう場所の入り口と言ったところかしら
？」

「これで一番弱いねえ、笑えてくるな」

「いいから早く扉を開けましょう。私早く帰りたいの」

華憐は早く倒して帰りたいようだ……まあ俺も同じ意見だが、俺は言われた通り扉を押しした。すると扉の大きさは違いとても軽い力で開いたのだ。

中から禍々しい程の殺気が2つ存在している。一つはそこまで大きくは無いがもう一つは確実に強いモンスターだろう。

「どうやら龍の前にコイツを倒さないといけないみたいだ」

俺は華憐に向かって声を掛ける。そして俺が指を指している方向には牛の顔をした2速歩行怪物と呼ぶに相応しいモンスターが立っている。そのモンスターの持っている斧は怪しげに光を放っている。そのモンスターの名前はミノタウロス、2速歩行の牛だった……

第6話（前書き）

最近、全然投稿してませんでしたね。
これからは頑張りたいと……… 思います？

第6話

薄暗い部屋の中にキラキラと光るミノタウロスの斧……その大きな斧を振りかざし真っ直ぐ華憐に突進していった。

「ぐあつ！」

ミノタウロスの上段斬りを華憐が自分の片手剣でもろに受け止めて潰れたような声を出す。

俺は糸を数本出してミノタウロスの足に巻きつけ、体勢を崩す。いつもならこれで足が千切れて終わりなのだ……だがミノタウロスの足には掠り傷一つ付いていない。

「面倒な奴だな……」

思わず苦笑いをしてしまい、ミノタウロスと相對する。

ミノタウロスは斧を振りかざし、横に薙ぎ払う。

「極糸、糸盾」
きよくし シールド

ミノタウロスの斧が横から糸の盾に阻まれて止まる。そして一瞬、ミノタウロスの動きが止まる。

俺はすぐに糸を解き、次の糸を編み直す。より強靱に、より強く、より鋭く

「極糸、王蜘蛛の巣>スパイダーハウス」
きよくし

ミノタウロスの足元に数百本の糸を巡らせる。その糸は1本、1本が細い剣と言ってもいいほどの切れ味を誇っている。

その糸でミノタウロスの足を巻きつける。だがミノタウロスは身体に装甲を装備している為、傷一つ付かない。

だが、それが狙いなのだ。

「転べ」

俺は一言、言葉を放つて一気に数百本の糸を引く別に足を裂く必要なんてないのだ。ただ転ばせて、甚いたぶ振ればいいだけの話、

「極きよくし糸、貫ドリル通」

鋭く纏められた糸をミノタウロスの装甲と装甲の間に差し込み、中でまた糸を枝分かれさせて体内に侵入させる、それだけでも激痛だろう。ミノタウロスは痛そうにもがいているが足が纏れて立てないようだ。

「お前達に感覚なんて物があるのかが疑問だろ？」

何の感慨も無く、ただ無表情で、黙々と糸を身体に突き刺す。そして内部から切り裂く。

中から攻撃されたミノタウロスの身体はバラバラ、とはいかなかったが盛大に血を吹き上げる。

可憐の悲鳴が聞こえるが今はどうでもいい。それよりも……

コイツを殺す事が先だろう？

「さあ、どうする？ ミノタウロス、お前は裂かれないか？ それとも割かれないか？」

「ぐああああ」

「……そうか、どっちでもないか。じゃあ死にたいんだな？」

低く呻くミノタウロスなどお構いなしに糸を突き刺し、低く呟く。

「きよくし極糸、内部切り裂きし魔糸<グロメルス・スラッシュ>」

思い切り中二だな、とか思いつつ糸を操る。

それに反応した糸、その数にして数百、分かれたのも含めれば千にも及ぶ糸が目指すのはミノタウロスの中、ではなく体内、無慈悲なる糸の集団が一箇所に刺さり、

枝分かれする。聞こえはいいのかもしれない、ただミノタウロスの身体の中を切り裂きながら枝分かれして、いろいろな方向から糸が飛び出る。

「殺したか……」

俺は一人で呟き、血を流しすぎているミノタウロスを見下ろす。

糸を抜き、仕舞う。

ポロポロのミノタウロスはピクリとも動かない。それと同時に華憐も動かない、否、動けない。

「華憐、大丈夫か？　グロかったかあ。まあ慣れて」

「あつ、うん」

華憐は上擦った声しか出ない。俺は悪い事をしたと思いつつ、ミノタウロスの倒れている方向を見据える。

ミノタウロスを、じゃない。その先にいるもっと巨大な存在、ドラゴンに

「華憐、行こう。仕返しするんだろ？」

「あ、当たり前よ。ここまで来て引き下がるわけ無いでしょ？」

「そうそう、華憐はそっちの態度の方が似合っているよ」

「……バカ」

「ごめんね、馬鹿で」

「うわっ、聞こえてた」

「うん、ばっちり」

「うううう……」

華憐は恨めしそうに此方を睨んでいる。俺は思わずその姿に苦笑してしまう。

なんとか話題を逸らさなければ……

「ギヤアアアアアア」

「ん？」

「っ!」

その時、聞こえてきた声はまるで待っていたかのように、部屋に響き渡る。

声の主は分かりきっている。華憐は顔が真剣になり、睨みつける。

ドラゴン、最強と呼ばれているモンスター、今まで誰も倒した事が無いといわれている、

というより倒された事が無いモンスター、

俺は自分でも酷いと思う程の笑い声を挙げて、ドラゴンに向かい叫ぶ。

「さあ、最強よ。俺に本気を出させてくれ　!」

その声に反応したのかは分からないが、ドラゴンは此方に目も眩むほどの赤い、紅い炎を放ってきた。

そして、戦闘が開始する

第7話（前書き）

12時に間に合わなかった……

第7話

目の前に居る巨体、高さはどれくらいあるのだろう。想像もつかない、足の大きさでも俺の身体の半分くらいはあるだろう。

そして首を上げると見えるのは黒光りする大きな鱗が何枚も重なっている不気味な全身、

手の先にある爪は反射で銀色に輝いて見える、そして遙か上空に光る赤い2つの光、

眼だ。此方を見据えている。

「っ！」

「え？ なにこの液体」

隣の華憐も気付いたようだ。この透明な上から降ってくる液体、それは多分ドラゴンの涎なのだろう。

という事は今ドラゴンの真下、

「危ない！」

「きゃっ」

俺は反射的にその場から華憐を巻き込み横に転がる。

その瞬間、元居た場所にあり得ない速度で通り過ぎる腕、たった一撃で、地面を抉った。

「あ、ありがとう」

「馬鹿！ そんな事言ってるな！ 死ぬぞ」

俺は更に華憐を抱え後ろに下がる、が今度の攻撃は範囲が広いようだ。

「ぐっ！」
「えっ？」

直後、高速で廻された巨大な尻尾が俺のわき腹に直撃する。俺のうめき声と華憐の疑問が同時に聞こえ、俺と可憐は吹き飛ばされた。鈍い衝撃、どうやら地面に激突したらしい。俺はわき腹に仕掛けておいた糸を解く。

「糸を使ったのに痣が出来てるのか……」
「直弥、貴方私を庇って……」
「今は黙れ」
「っ……」

確かに俺はわざと糸を仕組み、華憐を庇った。でもあの状態で両方が傷を負わない、という方が不可能だ。俺は鈍く痛む脇を抑えながら笑う。

「さあ、反撃をしよう」
「ええ」

俺は立ち上がり、横に並んでいる華憐に指示を出す。

「華憐、俺があいつの動きを止めている間にお前の剣で出来るだけ足を斬りつける」
「分かったわ」
「行くぞ！」
「了解！」

俺は短く言うとドラゴンの足に糸を巻き付けてその糸を辿り足の目

の前に移動する。
そして足と足の間をすり抜けて背中に移動、そして数十本の糸を出す。

「届け！」

俺は糸を真上に放ち、微かに見える赤い点へと糸を巻き付ける。
それをそのまま引っ張る

「ギヤアアアアアア！？」

いきなり視界が糸で覆われたドラゴンは驚きの声を上げる。

そんな事はお構いなしに俺は身体中に糸を巻き付け、締め上げる。

ドラゴンの鱗はミシミシと言っているが壊れる様子も無ければ痛がつてもいない。

化け物だ。

「華憐、今だ、切り裂け」

「分かってるわよ！」

華憐は足を踏み込むと一気に加速してあっという間にドラゴンの足に現れる。

「せいっ！」

短い言葉と共に高速で振り下ろされる剣と当り火花を散らす黒い鱗、
だが華憐は攻撃を止めない。

「はっ！」

先程攻撃した場所と全く同じ場所を横に薙ぎ払ったのだ。そして構え直し、斜めからも同じ場所を、それを繰り返す。効果があるかは分からない、でも繰り返す。全く同じフォームを保ったまま高速で振り下ろされる剣は残像が見える。

「はあっ！」

最後の一括と共に可憐は剣を足元の鱗に突き刺す。激しい拮抗の後、わずかに何か壊れる音がする。その音は鱗から聞こえてくる、そしてだんだん大きくなるたび、やがて可憐の剣がドラゴンの足に埋まる。

「ギヤアア！！」

足に強烈な痛みを感じたのかドラゴンは暴れ始める。締め付ける手が限界だ、仕方がない。

「華憐、そこから逃げろ！ 拘束が解ける」
「分かった！」

華憐は即座に後ろに飛び、ドラゴンとの距離を開ける。俺はそれと同時に拘束していた糸を解く。すると自由を奪われていたドラゴンは怒り狂った様子で可憐を睨んでいた。

俺はその隙を見逃さずに後ろで糸を出し、ドラゴンの下半身に掛ける。

「極糸、死糸滅裂」

一気にドラゴンの後ろから前に移動して糸を張り詰める。強靱で鋭い糸はピンと張ってドラゴンの身体を切り裂け……なかった。

「なっ！」

「嘘……！」

俺の糸はピンと張ったまま、だんだんと耐え切れずに切れていく。こんな事ありえるのか？ 今までで糸が切れるなんて事はなかった。

「一本じゃダメか！」

俺は即座に解き、糸を編み合わせる。そうして出来た十数本の糸でドラゴンの足に巻き付けて転ばす。

「極糸きょくし、王蜘蛛の巣>スパイダーハウス<」

編み合わされ、巻きついた糸は強力で切れたりほしくない。だがドラゴンは転ばない、バランスを崩しているだけだ。

「極糸きょくし、内部切り裂きし魔糸<グロメルス・スラッシュ>」

俺は華憐が傷を付けた場所に糸を突き刺し、枝分かれさせる。

ミノタウロスを倒すときに使った内部から殺す糸、

本当は相手を殺す為に作った技だが、このドラゴンには転ばせる事くらいしか出来ない。

これでやっと巨体を転ばせる事が出来た。転んだ時の振動はすさまじいものだ。

身体が揺れ、吐き気を催す。

だが今は構ってられない。

「極系きょくし、外部破壊せり魔槍<グロメルス・アウトスピア>」

数百ある糸を編みこみ、10本の槍を作り出す。

数は十本の槍、だが高速で突き刺し続ければ何回攻撃できるだろう。俺は十本の槍をそれぞれ違う場所に投げ続ける。

当たって弾かれ、当たって弾かれ、可憐がやっていたように全て同じ場所に打ち込む。

最初は火花が散っていたドラゴンの表面からは次第に真っ赤な液体が噴出し始める。

だが攻撃の手を緩めない。

「華憐！ ドラゴンの首を……」

「もうやってる！」

指示を出そうとしたが華憐はもうドラゴンの首に何度も剣戟を叩き込んでいた。

「ギヤアアアア」

ドラゴンの声に悲鳴が混じっているような叫び声になってきた。

それはそうだ、いくら最強と呼ばれていても色々な所から血が吹き出ればいつかは死ぬだろう。

「とどめー！」

俺は糸を解き、数百本の糸を目の前に出現させる。

「極系きょくし、内部切り裂きし魔系<グロメルス・スラッシュ>」

俺の糸がそれぞれの赤く血が吹き出てる場所に吸い込まれるように入っていく。

これだけの場所に傷を付け、一気に内部から肉体を裂かれればドラゴンだって死ぬだろう。

そんな希望を持ちながら糸を分かれさせる。

ブシャアと勢いよく血が噴出し、銀色に輝く糸が次々と姿を現す。

地面はドラゴンの地で血溜りが出来ており、ドラゴンはそれでもなお動いていた。

「なっ！」

「嘘でしょ!?!」

なんとドラゴンはまた起き上がろうとしていた。

だがそんな体力はもう残っていない。

内部から斬り付けてももう無駄だろう。

どうすればいい?

「もういい加減に死んでよ〜〜!」

その時、華憐がドラゴンの首にトドメと言わんばかりの一撃を見舞った。

直後、そこから血が盛大に噴出し、ドラゴンの首と身体が離れた。

「倒した?」

「うん、やったー」

華憐は返り血を浴びながらもお構い無しに飛び跳ねている。

見るとドラゴンの身体が消えて、一つの玉と一本の剣が地面に転がっている。

「何これ？」

「分らん」

俺達は首をそろえてそれぞれを手に取る。

直後、華憐の持った剣と俺の持った玉が光り始める。

「ふえ？」

「なんだ？」

俺達がそろって首を傾げていると光は収まり、俺の持っていた玉は右手のグローブに吸い込まれ、華憐の剣は黒く輝きを放ち始める。

(装備強化アイテム、龍の玉により武器が強化されました)

(剣装備アイテム、龍^{ドラゴンスレイヤー}絶命乃剣を入手しました)

女の声が何処と無く響く。忘れていた、これは一応現実アシストされた世界、

このようなアナウンスは聞こえても当然なのだが、しばらく聞いていなかったせいで忘れていた。

「装備を強化？」

俺が疑問に思い、糸を出してみると銀色の糸が黒く染まっていた。これが強化なのだろう。

「龍^{ドラゴンスレイヤー}絶命乃剣？」

華憐が何気なく呟くと黒い剣はまた輝きを放ち、刃の方がギザギザの形をした不気味な剣になった。まるでドラゴンの牙のように……

「これ、どうすればいいの？」

「とにかく俺達が倒したんだ。もらっていけばいいだろ？ それよ
り、早く帰って眠りたい」

「それは同感、じゃあさっさと行きましょ」

俺達は並んで歩き、神殿を後にする。

歩く途中、わき腹が痛んだが、帰ってから見ればいい。

「楽しかったなあ」

「え？ 何か言った？」

「なんでもないよ」

俺は独り事を聞かれて恥ずかしくなり適当にごまかして前を向く。
身体は痛い。

でももつと戦いたい。

心にそんな感情がある俺は、異常なのだろうか？

第8話(前書き)

PVが600000、夢ですかね？
これ

第8話

俺と華憐がゆっくりと歩いて到着したギルドは何やらとても騒がしかった。

皆が皆、倒したモンスターの状況などの情報が載っている掲示板を見ている。

俺達がギルドに入った瞬間に感じた視線は多分そういうことなのだろう。

「華憐、俺は目立ちたくないと思ってた……でもドラゴン倒したら目立って分かってたのに。なんでしよう？ この有様は」

「迂闊だった。確か掲示板には倒したモンスターの情報が掲示されるのよね……。直弥一人だったら静かに入って誤魔化せたんでしょけど」

華憐は溜息を吐いて頭に手を当てている。

俺は目の前に居る人の群れから頑張って目を逸らそうとしている。

「ドラゴンを2人で倒したんだってよ！」

「マジか！？ それどんなチームだよ？」

「いや、なんでも2人組らしいぜ」

「2人で？ 馬鹿な。無理だつて、自殺するようなもんだぜ？」

「でもよ、その2人組がよ、Aランクの向井華憐とまだ誰も正体を知らないSランクの神木直弥だつて噂があるらしいんだよ」

「でもよ、神木直弥は名前知ってるけど、顔知らねえんだよ」

「どこかの臆病者つて噂もあるぜ」

……こんな状態？ 俺はバレないように横に居る華憐に声を掛けようとして横を見てみると、華憐はもうその場に居なかった。

「あ、ドラゴン討伐任務完了しました。あ、報酬ありがとうございます」

（アイツは何勝手に受付行ってんだ？）

「直弥く、これ報酬だよ。すごいね！ ドラゴン1体で1000万！ 山分けで500万ずつでいいよね。ってどうしたの？ 直弥、他人面して」

俺の心の声が虚しく響く。どうやら華憐は俺がバレルのを気にしていないらしい。

実際、華憐は首を捻りながら500万を目の前に出しているのだ。……これ、受け取ったら絶対、神木直弥って証明されちゃうな

「華憐、お前は俺の性格を知っているか？」

「突然どうしたの？ 性格は残酷で無慈悲な男の子、容姿の話をするれば髪を切れば似合うのに切ろうとしない何か変な人」

「……お前の中で俺はそう思われているんだな。まあいい、今は俺が目立ちたくないという事を覚えているか？ と言う事だ」

俺は華憐の耳元で小さく囁く。

すると華憐は知っているよ？ という表情を作り、

「もう隠せないと思うよ？ というか隠さなくていいじゃん」

「……なに？」

俺はたつぷり数秒間、口を開けて華憐を見る。

今の俺を鏡とかで見たらアホみたいに呆けているだろう。

「聞えなかった？ 周りを見てみなさいよ。注目の的って気付かない？」

「なん……だと？」

俺は咄嗟に辺りを見回すと俺と華憐の周りにはすごい人数の人が集まっていたのだ。

皆が口々にSランクやらドラゴンを2人で倒したなどと喋っている。俺は凄い勢いで華憐の方に向き直ると華憐は目を閉じて首を振っている。

「無理よ、もう隠せない。諦めれば？」

「いやだね。俺は諦めない！」

何か誤魔化す事が出来るはずだ。そうだ。俺は神木直弥じゃないと分からせればいい！

「いやーしかし残念だったなー、直弥兄さんドラゴンと戦って死んじゃうんだもん。これから僕はどうやって生きてけばいいのかなー」

……完璧だ。

我ながらすごい演技がうまいと思った。これって俺、役者になれたかもな。

俺は白々しい目で此方を見てくる華憐に聞いてみる。

「最高だったろ？ これでもう俺の事は直弥の弟という認識に」

「バレバレよ？」

「おいおい、嘘だろ？」

俺は華憐の言葉に驚愕してもう一度周りを見る。

皆、此方に視線を向けているのは分かる。

その視線は皆、華憐と同じ白々しい視線を送ってきているのだ。

「嘘だろ？」

「本当よ。で？ どうするの貴方、正直に言っちゃいなさいよ」

「……げる」

「え？ 直弥、もう1回言って？ よく聞こえなかった」

「逃げる」

そう言う俺は真っ先に人を押しのけてギルドの扉を開ける。

そしてそのまま逃走、後ろに華憐がついて来るが華憐なら大丈夫だろう。

「はあはあ、疲れた。あの演技は完璧だったはずなのに……なんで？」

「はあはあ、直弥、貴方って戦っている時と全然性格が違うのね？」

「そうか？ 俺には分からんが」

「全然違うわよ」

華憐は息を整えながら言っている。

俺ってそんなに性格が変わるのか？

そういえば華憐だって……

「華憐だって、俺と会ったときと全然印象が違うんだが、気のせいかな？」

「ああ、それは貴方が信用していいと思ったからこうやって砕けた話し方をしているの。別にそれだけ……」

華憐はつまらなそうに呟くと、ふと何かを思い出したように俺の目を真っ直ぐ見てくる。

とは言っても、髪の色でほとんど見えないうつが……

「ねえ、直弥って自分の家、持ってるの？」

「……なんだ？ 急に」

「いや、別に聞きたいなあなんて」

「持つてはいないが……ずっと宿暮らしだからな」

家、それは宿などの大勢が泊まる場所ではなく、大金を払って自分だけの家を購入する事がこの世界では出来る。ただ軽く500万とかはするが、チームでお金を出し合いチームで生活する、という考え方も出来る結構便利な場所だが……

俺が考えるように言うと華憐は何やら顔を赤くして下を向いてしまふ。

それでも、小さい声を頑張って出している。

「そう、なんだ。ならば、今日私の家、来る？」

「なんだ？ 急にしおらしくなって、熱でもあるのか？」

「違うわよ！ ただアンタが貧相なワラの上で寝ていたりしたら心配だなあ、とか思ってただけだだけで別にそれ以上の考えとかじゃない……よ？」

「なんで最後に疑問なんだ？」

「いい？ あくまでドラゴンを倒してくれたお礼！ それ以下でも

以上でもないから、

誤解しないでね？」

「……ツンデレ？」

必死に言葉を発している華憐の姿はとても笑いを誘う姿でもあり、とても可愛いものでもあった。

「いいから、私の家、来る？」

「ああ、分かった、お前の家に行くよ」

「本当！？」

「ああ、今日は身体を休めたいからな。安めの宿だと身体が痛いからな」

別にもう慣れてしまった宿のベットでもゆっくり眠れたが今日は華憐の家に行く事にした。

「じゃあ、早速行くわよ」

「ああ、でも夕食はどうするんだ？」

「いいわよ。買い置きがあるし」

「そうか」

普段、宿屋では夕食などを出してくれるが家を買った人は自分で作らなければいけない。という難点もあるのだ。

食材をNPCから買取り、自分で調理する。

無駄だと思うのは俺だけなのだろうか？

華憐の家は密集している地域から少し離れた場所に建っていた。

周りに家が無いからだろうか、とても大きく見えるのは俺だけだろうか？

その2階建ての家はとても立派なものだった。

「入っていいわよ？」

「ああ、じゃあお邪魔します」

「はいどうぞ」

中に入り、玄関を上がると1本の長い廊下がある。

その廊下の奥に2階へと続く階段、そして手前にはキッチンと広間が広がっている。

行く途中で華憐の部屋、というなにやら可愛い文字で書かれた扉があったが……

あえてスルーした。

「装備をはずして、そこら辺に座ってなさいよ」

「あ、ああ」

俺は言われた通りに右手に嵌めてあるグローブを脱ぐ。

ただ防具は服同然の防具なので脱がなくてもいいだろう。

勿論、お風呂には入る。このお風呂の湯は実物かそれとも感覚だけの産物かは全く分からないが、身体を洗う行為をすればいろいろとサツパリ出来るので入る。

「今日は疲れたから簡単でいいわよね？」

「ああ、別にいいよ」

華憐の言葉に返事をするときッチンから出てきてサラダを運んできた。

……エプロン姿の華憐、鎧を着ているよりも数倍似合う。

元々白い肌の華憐の太ももは目を付けると離れさせないほど綺麗だった。

女の子の肌ってというのはこういうものなのか？ 不思議だ。

「何処見ているの？」

「い、いや別に」

「……そう。じゃあ食べましょう」

「ああ」

食卓の前に並んでいるのはパン、サラダ、スープ、なにやらタンパク質がほとんど無い食事だった。

「肉類は？」

「太る……」

「魚」

「嫌い」

うわあ……ベジタリアン？　しかし男の子にこの料理は酷くないだろうか？

「いやなら食べなくてもいいけど」

「いや！　食べます！　いただきます」

「はい、どうぞ」

自分から家に来るって言ったのに……

俺は心で考えながらもパクパクとサラダやスープを食べる。そこでいつもと違う感覚が出て来る。

「美味しい」

「でしょ？」

「ああ、すごい美味い！」

「良かったあ」

俺は宿での食事をただの栄養摂取として食べていた為、美味しいと思うことは無かった。

だが華憐の作った料理は質素だが素朴に美味しかった。

俺はいつもの倍の速さで完食して息を吐く。

「ごちそうさま。美味しかったよ」

「そう、それはよかった。じゃあ2階で今日は寝ていいから」

「泊まってもいいのか？」

「え？　最初からそういうつもりだったんだけど……」

華憐は首をかしげながら聞いてくる。

「そうか、じゃあ2階を借りるぞ?」

「いいわよ」

俺は華憐に確認をして2階に上がる。

2階にはベットと鏡、それと洗面所があるくらいの静かな場所だった。

「今日は疲れたから寝ようかな」

俺は自分のわき腹を見ながら苦笑する。

内出血を起こして腫れているわき腹はとても痛々しかった。

「おやすみ」

誰に言っているともなく呟き、目を閉じる。

今日は疲れていたせいか、意識はすぐに暗闇へと沈んでいった。

第9話

朝、またも鈍いわき腹の痛みで目が覚める。

軽く手を当てるのと包帯みたいな白い物体が巻きつけられている感触がする。

きっと華憐が治療してくれたのだろう。ん……治療？

「という事は華憐、俺が寝た後この部屋に来て……」

ガバツと跳ね起きて隣に寝息を立てている物体の存在を視線の端で目撃する。

機械のように首を捻ると案の定、華憐が隣で寝ていた。

「なんで？」

「スースースー」

華憐の寝息がゆっくり聞えてくる。俺は額に流れ出す冷たい汗の感覚を感じながら必死になんでこうなったのかを思考すると同時にこの後のことを予測する。

「とにかくなんでこうなったか？ という事は分からないからこの後の事を考えよう」

自分で納得してよく考える。

華憐が目を覚ます　なんでここに寝ているか？　隣に俺の姿＝死亡フラグ

「……1階に行く」

俺は華憐を起こさないように布団をどかし、ベットを降りる。そしてそのまま階段へ向かおうとして歩き出した時、

「あれ？　なんで私ここで眠ってるんだっけ？」

「ギギギギ」　俺が振り返る音

目の前にはぼんやりと目を擦りながらベットの上に座っている華憐の姿、

俺はというと華憐から目を逸らせずにとずっと見ている。

「昨日直弥が寝たのを確認してわき腹に包帯を巻いて、寝た？」

華憐が自分の行動を確認すると同時に素早く隣を確認、そして視線を戻した時に俺の視線と交差した。みるみる内に華憐の顔が赤く染まっていく。

「直弥？」

「……はい」

「私、隣で寝てた？」

「い、いや寝て……いました」

華憐の冷たい視線と凍るような言葉に襲われ、正直に話す。

華憐の赤い顔とは裏腹に俺は自分の顔が青く染まっていくのを感じる。

「俺は何もしていない……よ？」

「……そうなんだ」

華憐の言葉の鋭さが更に増した。俺の言葉は逆効果だったみたいだ。

「直弥あ？」

「……なんでしよう」

「とりあえず、1回死のう？ 話はそれから、ね？」

「理不尽だ……」

この後、2階から俺の断末魔の叫びが響いたのは言うまでも無かった。

「なんで俺が痛めつけられなきゃならないんだ？」

俺は目の前に出されたハムエッグとパンを見ながら朝起きた理不尽な事件に関しての事をまだ根に持っていた。

「私の隣で寝ていたから」

「理不尽だろう。お前が勝手に……」

俺は言葉を最後まで言う事が出来ず華憐の視線で心が押しつぶされそうだった。

「だ、だって隣で寝ているとは思わなくて……つい1発殴っちゃったの！」

「1発じゃねえよ！ 俺の顔見ろ！ 軽く5発は貰ってるね」

俺は自分の赤くパンパンに腫れた顔を指差して反抗する。

華憐は分が悪そうに笑うと先に朝食を食べ始めてしまった。

「華憐、何か言ってみろよ。なんで俺はこんなに殴られなきゃいけ

ないんだ?」

「それより直弥、今日は何するの?」

「……いやそういう事ではなくてだな。なんで俺はこんなに」

「ギルドで私のランクアップ手伝ってくれない?」

「お前、人の話聞いてるか?」

「手伝ってくれるの? ありがとう、じゃあ早速これ食べたら行きましよう」

「酷い……何か知らない所で話が進んでいる」

一向に聞く耳を持たない華憐、

「分かった、もういい。でもギルドランクアップは面倒だ」

「なんでよ? あんたSランクでしょ? 簡単じゃん」

「お前、ランクアップには自分と同じランクの依頼20個やらないといけなんだぞ?」

「分かってるわよ。でも直弥が居れば簡単だし」

華憐はにっこりと微笑むとパンを口に入れる。

俺は正直ランクアップのことをあまり考えて無かった。

なんか報酬の高い依頼をやっていたらいつの間にかSランクになっていた様なものだ。

他の人にはそれが難しいのだろう。しかも依頼をクリアしてもそのとどめを刺した人だけのランクアップ回数が1上がる為、一人でやるか、それとも自分よりランクが上の人を誘ってとどめを刺させてもらうしかないのだ。

実際このことが原因でギルド内で闘争が起こった事もある。

「ダメだな。俺は敵を見るととどめを刺しちまうから」

「何それ? 役に立つのか立たないのか分からないじゃない」

「全くですね」

「……ケチ」

華憐の表情は先程と違い頬を膨らませている。何故だろう。全然起こっているように見えない。

「ギルドはダメだ」

「分かったわよ。じゃあ買い物行こう？」

「なんでそこで買い物？」

「いいじゃない。丁度パジャマや下着が欲しかったの」

「いや、だからなんで？」

「奢って？」

華憐の表情が色々と変わる。今度は満面の笑みで奢って、だそうだが、生活用品、それは服だつて買わなければならぬ。まあ俺の場合、下着とかは2着、服も防具を2着と軽くしか持っていないが、女子はそうも行かないのだろう。

当然俺はどっちもいやな為断る。当然だろう

「じゃあギルド行くのと買い物、どっちがいい？」

「……買い物で」

「決まり」

俺は心の中で理不尽な叫びを上げている時、華憐の顔は想像もしいたいニツコリ笑顔だった。

NPCが経営している服屋には結構な人が集まっている。比率的には女子が圧倒的に多い、防具屋では男子が圧倒的に多い、俺は久しぶりに入る店に戸惑いながらも華憐の後に続く。

「久しぶりだな。こんな所」

「そう、あんたはどうせずっとモンスターと戦い続けてたんでしょ？」

「ああ」

華憐はジト目になって俺の方を睨んでくるが、俺が即答したせいだろう。もう呆れたような顔になってしまっていた。

「この服どう？」

「俺にそれを聞くか？」

華憐は自分の身体に服を当てて俺に聞いてくる。当然、俺は全く分からない。

「直弥からしたらどう？」

「まあ、いいんじゃない？」

「本当に？」

「ああ、凄く似合っと思う」

「じゃあこれ買っ」

どうせ家で着るだけじゃん。と思いつつも心の中だとどめておく。華憐はニコニコと笑って違う方向へ歩いて行ってしまった……

俺は結局、服を4着、下着を4着買わされて自分の財産が減った。俺のとっては全く損害がないくらいの値段だが……

「次、何処に行く？」

「まだ行くのか？」

俺は歩きながら隣に居る華憐を見る。

「いいじゃない。そうだ！ 私髪切ろうかなあ〜」

華憐は何か思いついたような顔で此方を見てくる。
俺は瞬時に理解する。

このままじゃ俺も一緒に切るハメになる……と

「切るにはいいが俺は巻き込むな」

「……じゃあ切るの止めようかな〜」

元々、切る気は無かったらしい。俺に切らせようとしていたのか……

「直弥さんですか？」

「え？」

俺は自分の名前を呼ばれ、後ろを振り向くとそこには自分よりも遙かに小さい女の子が居た。
髪を後ろで結ったポニーテール、どこかで見たことがあるような顔だった。

「直弥さん？ 忘れちゃったんですか……鈴木優です」

「優……優ちゃん!？」

「はい、あなたに助けをいただいた優です」

俺は驚いて優をもう1度見直す。身長は2年前とほとんど変わっておらず、顔は少し大人びた表情になったが俺の1つ下、つまり16歳にしては童顔なイメージを抱く。

「思い出して頂いて嬉しいです！ あの時直弥さんに助けて頂けなかったら私は今ここには居ませんでしたから……」

「いいよ、別に」

「ありがとうございます」

優はもう1度深く頭をさげてくる。俺は気まずい空気をぬぐおうと優に話題を持ちかける。

「優ちゃん、クラスメイトは一緒じゃないの？」

「え？ クラスメイト、ですか。えっと……今は別行動しているだけですよ」

「そう……」

優に言い方が少し気になったが普通に返しておく。次にきまらずい雰囲気になる前に今度は優が話を始める。

「そろそろ行かないと、それでは失礼します。直弥さん、Sランクおめでとうございます。」

それではまた時間があるときに」

「あ、分かった。また」

俺は納得して手を振っている優に手を振り返す。そして疑問に思っ

たんで俺がSランクだって知っているんだらう？

「まあ、最近ちょっと有名になっちゃったしな。分かるか……」

「ねえ、あの子だれ？」

「ああ、あの子は昔にモンスターに襲われている所を俺が助けた、ってなんでお前そんなに不機嫌なんだ？」

俺は華憐の顔がムスツとしている事に気付き、聞いてみる。

「別に、ただのロリコンだなあと思って」

「酷いな……」

「あなたにもそんな優しい時期があつたのね」

「今でも優しいだろ？」

「モンスターに襲われている子を貴方は今助けるかしら？」

「……」

俺が答えられないとほらね、と軽く言つて指をある方向に指す。

「突然だけど貴方は人の争いを止めるかしら？」

「え？」

俺は華憐の指を指している方向を見る。そこには2人の男女と1つのチームと思われる人達が言い合いになっているようだ。

俺は唇をかみながら心の中で毒づく。

くそっ、助けるか？ 助けないか？

心の中で2つの選択が生まれる。俺は必死に考える。

「まあ、貴方が止める前に私が止めるけどね」

「おい、ま」

待て、と言いつつ終わらない間に華憐は走って行ってしまふ。

「なんなんだよ！ 後味悪いだろ？」

俺もすぐに華憐の後に続く。

これで一人で華憐が事件を潰した後、俺が何て言われるか……

一人で考えながら走る。華憐はもうすぐ1つのチームと衝突する。

俺もだんだんと人の顔が鮮明に見えてくる。

「……最悪だ」

俺は呟いて止まるも後の祭り、華憐はもうチームに文句を言っている。

流石に一人では相手に出来ないだろう。

「なんでなんだよ？　なんでまた会うんだよ」

俺は2人の男女を睨みつけて、チームに突っ込む。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5806y/>

CLASS

2011年12月19日00時44分発行